

くらしの中で読む『正法眼蔵』

おうさくせんだば
王索仙陀婆の巻

その六

成興寺住職 小倉玄照

仏法をみきわめると

世尊せぞん一日陞座しんぞ、文殊白槌もんじゆびやくつひして云く、

「諦観たいかん法王ほうおう法王ほう法如にょぜ是」

世尊下座す。

雪竇せつちやうざん山明覚しやうけん禪師ぜんじ重顯じゆうけん云く、

「列聖れつせいの叢中そうちゆう作者しやう知る。

法王ほうおうの法令ほうれいかくの如ごとくならず

衆中しゆちゆうもし仙陀せんたの客きやくあらば

何なにぞ必ずしも文殊もんじゆ一槌いつつひを下くださん」

しかあれば、雪竇道は、一槌もし渾身無孔こんしんむくうならんがごとくば、下あ了未下りやうみ、ともに脱落無孔だつらくむくうならん。もしかくのごとくならんは、一槌すなはち仙陀婆なり。すでに恁麼人いんもじんならん、これ列聖一叢仙陀客なり。このゆるぎに、法王法如是なり。使得十二時、これ仙陀婆なり。被十二時使、これ索仙陀婆なり。索拳頭さくけんとう、奉拳頭ほうすべし。索さく拈へつ子し、奉拈子ほうすべし。

しかあれども、いま大宋国の諸山にある長老と称するともがら、仙陀婆すべて夢也未見在な

り。苦哉くさい苦哉くさい、祖道そどう陵夷りやういなり。苦学くがくおこたらざれ、仏祖ぶつその命脈めいみやくまさに嗣統しぞくすべし。たとへば、如何いか是ぜ仏ぶつといふかごとき、即心そくしん是ぜ仏ぶつと道取だうとする、その宗旨しゆうしいかん。これ仙陀婆せんたはにあらざんや。即心そくしん是ぜ仏ぶつといふは、たれといふぞと審細しんさいに参究さんくうすべし。たれかしらん、仙陀婆せんたはの築著ちくじやく磕著かつかつなることを。

正法眼藏 王索仙陀婆

爾時、寛元三年十月二十二日、越州大仏寺に在りて示衆。

△現代語私訳▽

ある日、世尊は高座にのぼって説法を始めようとした。文殊菩薩は、高座の下で槌をカチリと打って聴衆たちに告げて言った。

「法王（世尊）の法をよくよくみすえてみよ。

法王の法は、このようなものである」

そこで世尊は、黙って高座をくだられた。

（ずっと時代が下って）雪竇山の明覚禪師重顯（九八〇—一〇五二）は、この話に関して云った。

「居並ぶ八万四千の聴衆は、道場の法式作法を定めた者のことを知っている。法王の法を伝えるありようはこのようなものではない。衆の中にもし勘の鋭い、いわゆる仙陀の客がいたならば、文殊ももしかすると槌をカチリと打たなかったかもしれぬ」

そういうわけだから、雪竇のことばは、下した一槌が、もし完全無欠であってそのまま法を具現しているとすれば、槌を下そうが下すまいが、実はそんなことにこだわる必要はさらさらないので、と言っているのである。もしそうだとすれば、カチリと下した一槌が、実は仙陀婆なのである。すでにそのように一槌から自在に法を受けとめられる人であったなら、これは居並ぶ八万四千の聴衆がことごとく仙陀婆の客だ

ということになる。だからして、「法王の法は、このようなものだ」ということになる。一昼夜二十四時間を生きるということは、「仙陀婆を索める」ということのほかではない。無意識下に二十四時間を生かされているのも、やはり「仙陀婆を索める」ことである。指導者が拳頭げんとうをふるう時には、弟子はちゃんとそれに応えねばならぬ。私ほつす子すで指導をしようとしているときには、弟子はそれに応じねばならぬ。

しかしながら、いま大宋国の諸山で長老と称して指導者づらをしている連中は、仙陀婆ということについて夢にすら見たことはないらしい。苦々しいことであって、仏法の実践は地におちてしまったと言つてよからう。厳しく身をせめてつとめねばならぬ。仏祖ののちは、横着に身を任せては伝えられぬ。そのことをたえて言えば、「いかなるか是れ仏」と問いかげられると「すなわち心これ仏」と答えたりす

るのだが、その真意まごころがよく通じているかどうか。実は、これは仙陀婆の問題なのではないか。「すなわち心こころがこれ仏」という場合、いったいその仏はどこにいるか、そのことを臍はらおちすべく身も心もうち込んで究めねばならぬのである。もうすてにお気づきだろう、それは師と弟子とがたがいに真剣に仙陀婆をぶつつけあうことにつ

正法眼蔵 王索仙陀婆

このとき、寛元三年（一二四五）十月二十二日、越州大仏寺に在りて衆に示す。

人間生活と儀式

他の動物と人間とを比較してその特質をことあげすれば、視点の相違によつていろいろと言えそうです。私は、その一つに、「セレモニー（儀式）がなくては生きていけない動物が人間である」という言い方を加えても面白いのではない



かと思つています。集團で社会生活を営む時に、その成員を統合して行くためには、儀式が必須不可欠なものとなるのでしよう。

もちろん、多勢の修行者たちが寢食を共にして生活する叢林に於ても、儀式は昔から大事にされて来ました。師家（指導者）が、仏法の何たるかを修行者たちに語る場合も、一定の型に従つて、いふなればセレモニーの中でそれを行いました。

例えば、禪門の公案も、そういうセレモニーの中で師家が仏法の極意を語るための必要性から生まれたものではあるまいか、と私はうがつてみたくなります。あながちにそれが間違ひとも言い切れぬところがあるのです。

さて、この段の冒頭に引用された「世尊陞座」の公案も、そういう背景を念頭に置いて拝読した方がよくわかるはずです。これは、『碧巖録』第九十二則が出典。（『従容録』の第一則も「世

尊陞座」で、本則はまったく同じですが、『碧巖録』の雪竇の頌を万松老人が批評するかたちになつています。）

住持が公式の説法をするときには、法堂の須弥壇に登ります。高座から説法をするのです。

住持が高座に登り、いよいよ説法を開始しようとするときには、高座の下で今流に言えば司會者役の僧が、砧という堅木を八角形に削つた高さ二・四尺の台をやはり堅木で作つた槌でカチリと打ちます。釈尊が説法をするこの場では、文殊がその役をつとめています。

また、説法が終つたときには、槌を打つて説法開始を告げた人が、「諦觀法王法、法王法如是」と宣言して説法の終結を宣言します。これはセレモニーとして様式化されているのです。

儀式のおとし穴

ところで、儀式というものは、集團を統率す

るはたらしは大きいのですが、一方では、個性的な思考や行動を抑制もします。道元禪師は、

『永平大法規』の「弁道法」の中で、

「群を抜くも益なく、衆に違しては儀なし」

ということを仰せになっています。これは私たちとか儀式を重視する叢林（禪の道場）の修行に於て墮し易い欠陥を明確にしながらそこで修行の要点を巧みに表現しています。

一般には、このことばは、とにかくみんなと一緒にやるように、一人だけ群を抜く修行をやっても駄目なのだ、というふうに解釈されています。しかし、私は、もうかれこれ十年以上も前のことですが、永平寺に身を投じて修行生活をしながら、そういうやみくもにみんなと一緒に歩調を合わす修行のやり方を道元禪師は決してよしとはされなかったのではないかという疑問を抱きました。なぜなら、横着本性の人間は、とかくすると楽な方へ楽な方へと墮して行くか

らです。

四九日（四と九のつく日）は、「夜坐各寮」と

言って、夜の坐禪は銘々の部屋でつとめなさい、ということになっています。そんなとき、殆どの雲水は、各寮で本を読んだり、お茶を飲んだり、仕事をしたりしています。真面目に坐禪をしている雲水は、五指に満たないほどです。「夜坐各寮」の夜は、夜坐を休むのが「群」ですが、それに調子を合わせてしまつては、修行道場の質は低下してしまいます。やはり、たった一人でも僧堂で黙々と坐る「抜群」の人に畏敬の念を抱くべきなのです。「抜群」の修行をしても何の利益もないのです。しかし、仏道修行は決して利益を求めてするものではないのですから「無益」を覚悟で「抜群」の修行をつとめなければならぬ、と私は思うのです。

そして後半の句「衆に違しては儀なし」という注意がまた心にくいと思います。「抜群」を奨

励すると、とかくすると周辺の人間と不協和音を発し易いのですが、それでは駄目だ、とクギをさされているのです。抜群の修行をつとめながら、雲水仲間とはちゃんと調和がとれた生活を送っている—これが道元禅師の理想とする修行のありようなのです。

マンネリの打破

儀式とかセレモニーとかを重視する生活にならずむ時に生じやすい体制順応的な心の弛緩しかんをどう克服したらよいかという点について、このお示しは示唆に富んでいます。儀式の流れに身を任しながら、常に初心にかえった緊張感を持続していなければならないということです。

世尊の説法を聴く大衆に、体制順応的というか、墮性的というか、ある種の倦怠を文殊菩薩は感じられたのでしょうか。世尊の説法に感応かんのう道交どうこうして、自らの生きざまをさらに仏道に親しい

ものに昇化して行こうというような気迫がその場に希薄なことを問題視し、その打開の方法として、世尊が今や説法を始めんとするその刹那に、説法終了の宣刻をしてしまったのです。

さぞかし、世尊もギクリとされたことでしょう。思いもかけぬ文殊菩薩の鋭い一声に、世尊はしかし文殊の意図を素早く感知されました。間髪を入れない対応です。まるであらかじめ打ち合わせしていたかのような見事さです。まさに仙陀婆はかくあるべしといってもよいでしょう。

世尊と文殊の火花の散るような鋭い勤と勤の対応ぶりにハッと胸を打たれた大衆がはたして何人いたか。動静は大衆に一如する生活をしたがら、内に抜群の志気を秘めた道心の堅い人間でなければ、それは不可能なことなのです。(この項つづく)